

## 第六十七回コスモス賞

無音のk

三 重 もりた 森田 はるお 治生

右の通り贈ることを決定した。

令和二年八月

コスモス短歌会

### 森田治生の作品について

森田治生さんは団塊の世代の最後の年一九四九年生まれ。三重県四日市市在住。コスモス入会は二〇〇五年。二〇〇九年に純黄賞受賞。二〇一一年には月集シリウスに昇級。二〇一四年「いつか来る日」と題して母を詠み、〇先生賞を受賞している。

ぬばたまの夜をたやすく騎士にする無音のkの力は偉大  
上の句を読んだだけでは歌の意図が伝わらない。下の句の「k」によって一気に光が差す。夜は night、騎士は knight。無音であるが「k」の偉大な存在に気付いたのだ。読者も文字kの有無には気付く。気付くが偉大な力には気付かない。気付きを的確に把握する。読者に明確に提示する。それらの力を身につけているから可能となった一首である。

自動車もやつと名前に追いつくか生まれて二百年ほどが経ち  
軍隊がなくなり七十四年なり軍手をはめて松をととのふ  
一首目、理系的な意識が垣間見える気付きの歌。時の流れに寄りそう変化を見逃さない。手動の消える日を思う。二首目、平和

を希求する目、社会批評の目も確かである。

水張り田となりて五日目いづくより来たる蛙が闇を騒がす  
三歳とひと日遊んだあくる日の頬骨筋のほどよき疲れ  
一首目、自然への目配りも怠りない。「騒がす」の捉え方がいい。二首目、身体の変化にも敏感だ。頬骨筋は頬の筋肉。笑顔を絶やさず相手をされたのだろう。

六十年前と変はらぬフォルム良し三角定規、コンパス、分度器  
操縦器敵が奪へば敵となる鉄人28号の闇

一首目、モノは逃げない。じつくりと観察できる。素材は進化するが機能は変化しない。そのことに気付く底力を思う。二首目、透徹した意識が見逃さない。

日常の暮らしから歌の種をすくい上げ、理知のフィルターを経て作品化する。緻密で行き届いた配慮により語彙を斡旋し一首を構築する。歌境に独自の深み加わるのは間違いない。個性ある歌の旨みを我々はさらに楽しむことになるだろう。

# 無音のk 第六十七回コスモス賞受賞作品

ぬばたまの夜をたやすく騎士にする無音のkの力は偉大

勇ましき名を持つ鍾馗水仙を風台風が倒してゆけり

工場に隣りて広がるキャベツ畑濃尾平野の利用さまざま

ウイルソンの霧箱の底にゐるごとし航跡しるく残るあきぞら

五十年のちのある者、あらぬ者、あやふき者が一つ家に住む

仲間はずれそここにあり漢字でもわには魚偏たこは虫偏

「かこちがほ」など知らぬ児が西行をめくりて「オーマイガー」と叫びぬ

僧正も大僧正も苦笑ひしてゐむ児らに坊主と呼ばれ

自動車もやつと名前に追ひつくか生まれて二百年ほどが経ち

赤鬼と青鬼のかほ透けて見ゆ二月四日のゴミ集積所

鍋納めそろそろせむか隣家の加賀白梅が二分咲きとなる

九百年前にリゲルを発ちし光わが網膜に旅を終へたり

終電を待つ人のなか一番の年長はわれたぶんではなく

寂しくて人と会ひたくない時はAB型のふりして過ぐす

三重 森田 治生

作者感想

梅雨の晴れ間に届いたコスモスと向日葵の押し花の電報に、先ず驚き、それからじわじわと嬉しさがこみあげてきました。同時に賞の重みに背筋が伸びる思いがいたしました。

定年という言葉が脳裏を掠めるようになって十五年、新たな生き甲斐にと始めた短歌は、私の日常に豊かさを与えてくれます。

ご指導下さった選者の皆さま、お世話になりました。コスモスの皆さまありがとうございます。

七十年前にA I備へをり鉄腕アトムと妹ウラン

操縦器敵が奪へば敵となる鉄人28号の闇

救急車停まれば皆が顔を出す近所付き合ひほどほどにあり

コスモス誌通巻千号がんばれば読めるかも知れずあと十七年

職を退き三百六十五連休 十連休も凡々と過ぐ

六十年前と変はらぬフォルム良し三角定規、コンパス、分度器

軍隊がなくなり七十四年なり軍手をはめて松をととのふ

〈百年の孤独〉を独り飲みにつつ父の生誕百年を祝ぐ

敵味方五十四もの死ののちに勝利投手がインタビュ受く

流暢と言へぬ英語のアナウンスなにやら親し夜の〈ひかり〉の

米作りもう止めました、もう止めます歌会の席でふたりが言へり

削り氷ひはあてなるものと記したる清少納言に「いいね！」をあげる

バクの絵を枕の下に置く孫よマレーのバクは夢魔を食べない

花びらを揺らす風なき夏の庭へメロカリスは上向きに咲く

台風がどれだけ来ても〈上陸〉をすることはない沖縄県に

決断が八月十五日より早ければ たとへば八月五日だつたら



#### 作者略歴

- 一九四九年 名古屋生まれ
- 二〇〇六年 コスモス短歌会入会
- 二〇〇九年 第六回純黄賞受賞
- 二〇一四年 第六十回〇先生賞受賞

## 選考資料抜粋

第六十七回コスモス賞の選考は二〇一九年の月集・その一集会員の年間作品を対象として、選者より候補者五名の推薦を求め、高野、影山、桑原、狩野、宮里、小島、木畑、大松、田宮、津金、小山、福土、藤野、風間、田中、藤、水上比、鈴木、原賀、水上美、大野、松尾の各氏より回答を得、被推薦者は十九名であった。編集部では、その集計をもとに六月十三日編集会を開催して検討し、森田治生の授賞を決定した。森田作品とともに、松下菜水作品も討議の対象となった。ここに、選考資料となった推薦文と推薦作品を整理して掲載する。なお、推薦文は都合により省略したケースもある。

A・

## 1位 森田 治生

斬新で自在なものへの捉え方の背後には、理系の知性がある。家族詠からはすこやかな愛情が感じられる。作歌力に磨きがかかり、すぐれた歌を多く詠んだ一年だった。

## 2位 松下 菜水

物愛い情感、冷めた眼差し、あらゆる種の諦観のようなものがたたく作風である。しかしそれを歌う姿勢は真摯といつていい。四十代の独身女性の哀歌が出ている。

## 3位 中津川勲坐

自らのルーツを凝視して歌う。この年に、亡き両親の住んだ家を整理して、手放した。そのせいもあり、幼い頃を回顧した作品に味わい深いものが多かった。

## 4位 竹内みどり

家業は電器店で、仕事の歌を生きたさと詠む。仕事を通して、人

間を深く見つめるところがあり、思索的な面もある。社会の弱者に向ける眼差しがやさしい。

## 5位 伊沢 玲

専業主婦で、作品にはメルヘンのような味わいがある一方、社会に向けて開かれた方向性もある。長男が就職したが、子離れのむずかしさを感じているらしい。

B・

## 1位 森田 治生

言葉への関心、時代を見据える目など、機知と諧謔に富む作品が読者を覚醒させる。抒情の質は一見乾いているが、孫の歌には好々爺の味わいがあり、家族詠が暖かい。

## 2位 松下 菜水

人生をみつめる眼差しに含差や寂しさを湛えながら、詩情ゆたかな比喩が魅力的。重層する感情を具象化する技が巧みで、奥行きのある深い作品が多い。

## 3位 中津川勲坐

断腸の思いで故郷の家を整理、処分する歌、時代の変化を鋭くキヤッチする歌、科学者ならではの硬質な表現が個性的。一方でユーモアを湛える作品にも余裕がある。

## 4位 小沢 まき

意表をつく発想が詩情をたかめてい。日常詠でありながら、静謐で深淵な独自の作品世界を作り上げてい。

## 5位 中村 仁彦

癌の術後を、意欲的に詠みつつづけている作者だが、老いた母への眼差しが温かい。いのちをみつめる眼が深い。

C・

## 1位 森田 治生

男らしいすっきりとした詠み口にひかれた。また、知的な言葉遊びのような歌は、遊び心をそそがれて楽しい。

## 2位 小沢 まき

繊細な感覚で詠まれて、違う世界が見えてくるような歌に魅力を感じた。

## 3位 松下 菜水

両親と和解するあたりの細やかな心の揺れを詠った歌が心に沁みた。

## 4位 佐々木佳子

何気ない日常の中に歌を見出し豊かに詠っている。

## 5位 早川 晃央

教職の現場の歌を興味深く読んだ。コロナ禍の学園歌に期待する。

D・

## 1位 森田 治生

一首、からっとした印象を受ける。取り上げる素材が理工的であるからかもしれない。ものの見方の幅を広げて詠むのが上手い。社会への批判を緩やかに沈潜させて詠む。

コスモス賞候補推薦・集計と作品抄

☆森田 治生作品……………72点

自動車もやつと名前に追いつくか生まれて二百年ほどが経ち三歳とひと日遊んだあくる日の頰筋のほどよき疲れ軍隊がなくなり七十四年なり軍手をはめて松をととのふ台風の進路伝ふるテレビニュース玉城デニーの勝利を隠す仲間はずれそここにあり漢字でもわには魚偏たこは虫偏寂しくて人と会ひたくない時はAB型のふりして過ぐす六十年前と変はらぬフォルム良し三角定規、コンパス、分度器七十年前にA I備へをり鉄腕アトムと妹ウラン

終電を待つ人のなか一番の年長はわれたぶんではなく職を退き三百六十五連休 十連休も凡々と過ぐ

ウイルソンの霧箱の底にゐるごとし航跡しるく残るあきぞら台風がどれだけ来ても(上陸)をすることはない沖繩県に

コスモス誌通巻千号がんばれば読めるかも知れずあと十七年削り氷はあてなるものと記したる清少納言に「いいね！」をあげる

決断が八月十五日より早ければ たとへば八月五日だったら医療系ドラマ見てゐるわれを見てふふと笑ふ看護師の妻バクの絵を枕の下に置く孫よマレーのバクは夢魔を食べない

☆松下 菜水作品……………57点

後半生はじまりてゐむきんいろの缶に薄荷のドロップ残る杳き日の大陸移動を思はせて茜空ゆく雲の島々

わが過去が並べて肯定されてゆくオセロのごとく裏返されて凭ればギギと音する木の椅子に母の便りをまた読み返す

歳月の河の流れに石円くなりたるごとく父は居ませりこのひとと話するとき思ひ出すわたしが吹くと鳴らぬ縦笛

2位 松下 菜水

上句と下句との取り合わせにどきりとする。絹の糸で繋がっているからだ。独特の感性が伝わる。比喩も上手い。これらの独自性、新奇性が読者を離さない。

3位 中津川勲坐

己をきびしく見つめ歌に昇華している。家族の歴史とともに歌が生まれている。二つの事象を比較し歌を生む方法を会得している。

4位 伊沢 玲

作者ならではの感性には柔軟性と独自性がある。枕詞を生かす技術がある。句またがりを駆使してリズムに変化を与えている。

5位 米田 郁夫

どこか素朴な味わいがあり、ところが癒される。生き物に寄せる眼差しが温かい。自己主張の確かさが読者を納得させる力となっている。

1位 森田 治生

定年後の日々を丁寧に取り、家族を詠む温かさ、現代社会を捉える眼の鋭さに、独自の切り口が冴える。歌の素材が広く、リズム感の良さも魅力。

2位 松下 菜水

両親とのことや、人間関係の微妙な心理を詠み、思いを風景や物に託して描写することで表現を深めた。

3位 米田 郁夫

葛城ならではの、豊かな自然とともに生きる歌が魅力。癌の手術を乗り越え、生命の喜びが歌から滲み出す。

4位 佐々木佳子

日常の何気ない一駒を捉え、詩に昇華する。津軽の風土を詠む歌、老いてゆく親を見つめる歌など、情感が籠もる。

5位 豊島 秀範

端正な歌柄の中に、人を思う優しさが滲み出す。自らの病も冷静に見つめて詠う。

1位 松下 菜水

伸びやかな韻律に、やや屈託のある心情を乗せて詠む。一首のどこかに表現の工夫があり、詩に昇華しようとする営為が伝わる。

2位 森田 治生

対象を知的に、分析的に、軽やかに捉え、表現することがうまい人。平凡に見えるものの中に非凡を見出す着眼点がいい。

3位 伊沢 玲

梅雨のあめ吸ひてふとれる枇杷の実を食めばいよいよ嫉妬深まる  
会へぬ日は間奏のやう春なれどサキソフォンのさびれた音色  
どこまでも駈けてゆけさう 秋のそら継ぎ目なく晴れホイッスル鳴る  
本棚に闇あり人魚が泡になる童話一冊抜かれたるまま  
公孫樹の葉散りつくしたる並木道ブーツを履けばふかぶかと冬  
エンディングノートに記したきことも思ひ浮かばず母を漬す

☆伊沢 玲作品……………41点

くずのはの裏工作が露顕して獄に眠れるカルロス・ゴーン  
わかばかぜ窓いっぱい吹き抜けて無何有の郷のやうなるわが家  
子離れのできないわれにできることできたふりしてワッフルを焼く  
悲しみがダイオウイカとなり泳ぐかつての母にもう会へなくて  
わたし今どこのあたりかな初空につらなり浮ける雲のすごろく  
家中を捜してきのふ見つかりし母のがまぐち再び消える  
双六のあがりは来世だれもみないつかかならず上がれる来世

公転と自転はいかに止まるのか春の日永の果てしない問ひ  
いちにちの業務を終へてたまるるパンタグラフに霧やはらかし  
葦の葉の灯心蜻蛉とびたたせ沼のほひを描くアニメーター  
☆片岡 絢作品……………27点

ふいに子を喫ぎたくなつて包丁を置いてテレビの前の子に寄る  
(夫婦間家事不平等条約)に調印しない意志さへあれば

「結婚は」結婚したら「お子さんは」子が産まれたら「二人目は(おい)  
かはいいと子を見る我を見て父はさういふ我がかはいいとつぶ  
保育園の七夕飾りの笹の香をふかぶかと嗅ぎ職場へ急ぐ  
蜂蜜の瓶に沈んだスプーンを思ふけれども目覚ましは鳴る  
母さんは母さんで寝る 父さんは父さんで寝る それだけの夜  
疲れたと思ふすなはち實際は疲れてゐないのかもしれない

☆中津川勲坐作品……………26点  
父母のほほ笑む写真千枚をちぎりてわれは邪鬼になりたり

人生の半ばを過ぎたという自覚  
が作品に淡い影を落とし、魅力的  
母上を詠まれた作品の切なさが胸  
をうつ。

4位 中津川勲坐

科学的な視座がやはり作者の持  
ち味。説明に依らず、詩情豊かに  
仕上げる。ペーソス溢れる作品も  
面白い。

5位 中村 仁彦

大病後の日々を詠んだ作品の深  
みが印象的。歌によって生を支え  
る作者の姿にうたれる。

1位 松下 菜水

日常の事物から詩を生み出すこ  
とに優れている作者である。的確  
な具体や事物を示すことにより、  
ことばで直接に表現しにくい内面  
を描き出している。

2位 森田 治生

日常のなかに独特な発見があり、  
それを詩的に表現する優れた技が  
ある。その発見を詠うことによつ  
て読者にもはつとするような気づ  
きを与える。

3位 中西 正博

大きな出来事も身近な具体を示  
すことにより読み手にその情景を  
とどけることができる。長い歌歴

と対象への的確な視線が堅実な詠  
いぶりを支える。

4位 中津川勲坐

ふるさとのこと、家族のことな  
ど作者の個人的な題材が具体性  
をもって表現され読者に伝わる。自  
身に対する冷静な観察に裏付けら  
れている。社会詠も印象深い。

5位 小沢 まき

身のまわりの小さなできごとか  
ら詩を生み出す力があり、差し出  
されて初めて読み手が気づくこと  
がある。表現はみずみずしく読後  
感さわやかである。

1位 松下 菜水

おおむね負の感情といつてよい  
心の動きを、卓抜な比喻や見立て  
を用いて、美しい一首へと生まれ  
変わらせている。

2位 森田 治生

対象にそそがれる視線は時にシ  
ニカルではあるが、ユーモアを湛  
えた持ち味が読者を楽しませてく  
れる。

3位 早川 晃央

教員としての仕事に励む日常を、  
若々しくエネルギーッシュにストレ  
ートに詠み、歌に力強さがみなぎ  
っている。

長岡の父母住みし家を売る書類の署名 けふもためらふ

「夜さり」は祖母のなまりか、ちろちろと山に狐火見え出す時分  
蛭にも星にもならぬ亡き児らは缶蹴りしをり真夜の校庭

セシウムは詠まれなくなりしくしくと原子時計が音無くすすむ

スーパールのロイヤルブレッド食ひ飽きたわれは令和の奢るルイ王  
増えざれど欠くることなく年の夜に家族四人で食ふ蕎麦うまし

結納に父母と来し家その門の高き馬酔木の花とも別る

☆中村 仁彦作品

15点

葉をおとす泰山木は伐られたり回覧板に賛否を問はれ  
器械にて声出すわれに耳寄せて聞きくれるひと遠ざかるひと

河豚の子が岩間を走る入り海の静かに揺れて平成終はる

咽頭とりてうつせみのいのち残りたりのんびり生きよのんびりできぬ  
ステージフォーだつたからだの緊張をすこしゆるめて冬の青空

癌再発させる恐れがあれば酒飲まずときさまんぢゆうを食ふ  
再発の可能性ひくくなるわれに「ふつうに生きる」欲が萌せり

☆小沢 まぎ作品

13点

仄明かりする水面かも読み終えてソファーへ置いた岩波文庫  
溪底の風の静けさ思いおり豊に午後の耳を当てつつ

ソファーから右手を垂らし横たわる消したい記憶が流れ出るよう  
過去ばかり納める箆筒 開けるたび小さな風は生まれるけれど

水道水飲み干すときは眼を開く無限遠点が見つかりそう  
李剥きつつ思うイワン・イリツチの死ぬ前の声「ゆるめてくれ」を

☆佐々木佳子作品

13点

あの角に監視カメラがあるゆゑに丸き背中をしゆつとしてみる  
米食べる家族が一人、二人へり米一合をとぐ指さびし

ワンピースに麦藁帽の少女ゐる寺山の歌ふつとこぼれる

「あ」と声が出てしまひたりピーカーと三角フラスコ百均にあり  
梅の実のおへそとおしりを丁寧につけばくすくす笑ふ声する

4位 中村 仁彦

自らの病と向き合い、その静かなまなざしから生まれてくる抒情を、ていねいにきちんと汲み上げている。

5位 中津川勲坐

年を重ねてゆく思いを、周囲の出来事や折々の心象風景に託して、だが力むことなく歌い上げている。

I・

1位 伊沢 玲

日頃の努力が、確実に作品に反映している。軸足は〈主婦〉にありながら、視野を広くして、人生を見つめた歌が秀逸。

2位 森田 治生

ここ数年、ますます作歌に磨きがかかってきた。社会詠はシニカルに、家族詠は温かく、作者の手柄が歌に滲む。

3位 佐々木佳子

特選七回。どの歌も中味が濃いのに軽やかで、力量を感じさせる表現力がすばらしい。

4位 中村 仁彦

大病の歌をさらりと詠んで読者の胸を打つ。こまやかな愛情があふれている。

5位 竹内みどり

日常生活の中から、題材を見つ

け、切り取り方がうまい。ユーモラスな詠み口が小気味良い。

J・

1位 伊沢 玲

人生の喜びや悲しみを柔らかな言葉で的確に表現する。全てのものに対するまなざしが優しく、読むと心が温かくなる。特に母や子を詠んだ家族詠に惹かれる。

2位 森田 治生

社会詠が鋭く、時にユーモアがあり魅力的だ。言葉をモチーフにした歌もセンスが光る。

3位 松下 菜水

大きな景を詠んだかと思うと微妙な心の動きを詠んだり、さまざまなお歌がある。感覚が瑞々しい。

4位 中村 仁彦

手術後の心の変化、見える景色、家族の事などが丁寧にかつ前向きに描かれ、心動かされる。

5位 平尾 潤子

日常の何気ない出来事を独自の視点で生き生きと描く。味わい深い作品が多い。

K・

1位 片岡 絢

子供の歌も、家事や仕事の歌も自身の真意を詠う人。だからか、片岡絢の歌は、読者を自然へ還す

百歳を生きるためには金が要る見上げた先の極薄の月

☆有川知津子作品.....12点

目覚めればとにりに母が眠りをりこんなささいなことがしよつばい  
風に雌雄ありてこよひの風は姫ねこのしつばがしなやかにうつ  
ターナーの描けるやうな空のした崩れた蟬を掃き寄せてる  
竹の花はそくかほそく垂れるたりミルクの多いオムレツのいろ  
閉園の音楽ふいに鳴り出でて竹の空洞すこしふくらむ

☆奈良橋幸子作品.....10点

いづこにも影ともなひてあゆみろし身は定まりぬ夕暮れのバス  
抒情的ことばのやうなまなこゆゑ一歩踏み出る黒馬のまへ  
江戸椿正義は花をはりたり取り残されて思ひみる色  
来し方のあのくらがりに鳳仙花あかく咲きけり暁らへば見ゆ  
愛恋は過ぎき七月咲き継ぎしのうぜんかづらの花も終りぬ

☆中西 正博作品.....9点

わが裡の弥次郎兵衛殿老いたるか、穂すすき採らむと斜面に転ぶ  
（書を捨てて街へ出よう）またわれに出かけるところ三つ四つはある  
はかなき世にまだ生きてゐるわれありて夏夕風の川べり歩む  
ソクラテスに会つて来たごと生徒らに話しし罰か 声出なくなる

☆竹内みどり作品.....8点

虫呑みし樹脂が琥珀になるまでの曠劫はるか思ひみがたし  
電器屋はよき仕事なり笑はせて笑ひて年々太りゆくなり  
前をゆく車のナンバ1999三つ子の胎児のねむるたのしさ  
あしたにもあしたがあると思はせる久慈の琥珀のなかの夕映え

☆吉田 史子作品.....6点

みどりごを片手に抱きて本を読む新米祖母を子が叱りたり  
キッチンにはちみつ凝る季節来てエプロンのひもきつちり結ぶ  
人生の休息のごと葉ひも本に垂らして今は眠らむ  
葉の木沢踏切わたれば目の前に夏の岩手山寡黙に立てり

力を持つている。シンプルな構文、

張りのある韻律。それは真意を述

べる勇氣から来るものだろう。

2位 森田 治生

言葉や知識からの発想で、読者  
を覚醒する。しかし知の人だけで  
はなく、知的真実を見抜く眼力  
で、社会や時代をも見据えている。

3位 有川知津子

古典にかよう韻律を備え、歌の  
姿に品格がある。静かだが、心奥  
の思いの伝わる詠み口で、家族詠  
にも、どこか人間愛を感じさせる。

4位 伊沢 玲

あたたかい家族詠に特長を持つ  
人だが、家族から離れた時のまな  
ざしは、深く鋭く思索的だ。韻律  
がやわらかいので、思索系の歌に  
も魅力がある。

5位 久保田智栄子

自己を含めて、対象へのまなざ  
しが伸びやかだ。詠むことと生き  
ることとに乖離のなさそうな歌柄  
で、興味の幅も広く、そこから、  
作者固有の歌を編みだしている。

L・

1位 有川知津子  
多くの作品には故郷と家族が息  
づき、そつと差し出すように詠ま  
れる。身体感覚、韻律共に申し分

ない。

2位 片岡 絢

日々の暮しを掬い取り作品化す  
ることを楽しむ姿が作品から伝わ  
り、自在なリズムが読者を楽しま  
せてくれる。

3位 森田 治生

物と言葉にこだわる知的な詠み  
に、発見と工夫がみられる。さり  
げなく差し出す社会詠に切れがあ  
る。

4位 伊沢 玲

認知症の母、父への思い、子の  
成長など日常を詠む作品も心を打  
つが、間に挟まれる叙景歌にも心  
象が滲む。

5位 中西 正博

自らの老いを素直に見詰め、若  
き日や愛する登山、自然への深い  
思いを丁寧に掬い取っている。

M・

1位 吉田 史子  
北国の厳しい日々の暮らしを抒  
情性に富んだ表現で詠んでいて、  
味わい深い作品が多い。夫や子、  
孫を詠んだ歌には、温かいまなざ  
しがあり、佳品も多い。

2位 片岡 絢

子育ての日々や夫婦の日常を非  
常に新鮮な発想で詠んでいる。ま

☆久保田智栄子作品……………6点

純白の羽がいちまい降りてきぬ子が読む『蒼き狼』のうへ  
全否定されて帰宅をせし夜は（秋映）といふ林檎を齧る

老眼となりてうれしきこと一つわたしのケイロンいて座が見える

家族らが各部屋にもどる午後十時こつそり食べる抹茶のあいす

☆漆崎健一郎作品……………5点

転作の田の麦熟れて立つる香を野に足停めて息深く吸ふ

巣を持てる雲雀にあらむ麦刈りし跡跡す煙に近づきて鳴く

春分を待ちぬしごとく鶯が未だ明け切らぬ庭の樹に鳴く

☆早川晃央作品……………4点

「平成と書かれた封筒から使え」平成の在庫処分始まる

面談でボク、ゲイかも…と明かされる違いは違い間違いでない

英虞湾に潜る瞬間だけ海女は足を水面に垂直にする

五時半を過ぎて早川先生は終わり駅前へと飲みに出る

☆米田 郁夫作品……………4点

ゐのししの掘り起こしたる木の根方乱れて深しひづめの跡は  
免許証わが手にありて五十年返納などせぬ過疎地に住めば

六月の満月まるくまろやかだ膀胱癌の術後のオレに

駅までは五キロの土地に住みをれば虫の音楽し雨音淋し

☆平尾 潤子作品……………1点

咳をして放哉おもう鳥取の空はどうしてこんなに重い

いつになく大きな音の夕波が今年の夏を連れて去にたり

上半身あらわな娘が乳をやる（夕ヒチの女）の海の匂いに

☆豊島 秀範作品……………1点

千両の赤き実ともる冬の庭給与とどかぬ年がくれゆく

水頭なます口に踊りぬ村上の三面川をのぼりたる鮭

ダビンチといふ名の支援ロボットが前立腺の肥大を削る

た、リズムや比喩の面でも斬新な  
歌が多く刺激に充ちている。

3位 中村 仁彦

癌治療後の、肉体的にも精神的  
にも厳しい日々を、冷静なまなざ

しを持ちつつ、時にユーモアも交  
えて詠んでいる。

4位 竹内みどり

作業に勤しむ中での、さまざま  
な出会いが詠まれている。地方な

らではの厳しい実情に奮闘する姿  
も生き生きと詠まれている。

5位 森田 治生

定年後の日々を機知とユーモア  
を交えて自在に詠んでいる。発見

の歌が多く、視点の豊富な点も魅  
力がある。

1位 漆崎健一郎

風土に親しみながら生活し、そ  
の繊細な変化を凝視しながら生活

する作者である。多くの作品の四、  
五句の捉え方が新鮮で魅力的。

2位 中西 正博

人生に明るく前向きに対処して  
きた作者の思いが伝わる作品が魅

力。若々しく学びながら生きてこ  
られた作者であろう。

3位 森田 治生

団塊の世代の作者の発想は若々

しくユニークである。心のおもむ  
くままに作歌する。作品は読者を  
豊かで楽しい気分にさせてくれる。

4位 松下 菜水

じっくり心の底を見つめ深く内  
省しながら詠う。作者の手柄をし  
のばせる。

5位 伊沢 玲

根底には豊かなユーモア感覚が  
あり、かなしみや思いを明るく詠  
んでいる。個人的時事詠も嬉しい。

1位 片岡 綯

虚飾のない表現が、強くて大ら  
か。仕事、子育て、夫婦の機微な

ど、いずれも自然体でありながら、  
現代女性としての覚めた意識とユ

1モアが絶妙である。

2位 有川知津子

独特の感性としなやかな文体に  
加えて、知性と情感のバランスも

優れた作者である。古典的なフレ  
ーズの生かし方、祖母や母への眼

差しなども魅力的。

3位 奈良橋幸子

古風で端正な作品ゆえに、艶や  
かな抒情が際立つ。存在のはかな

さや命の陰影、季節の気配など、  
普遍的なテーマを淡々と彫り深く

表現して、独自の世界がある。